コロナ禍と五輪

新型コロナ感染者が微増を続けているが、首都圏 1 都 3 県に出されていた緊急事態宣言が解除されることになった。昨日 18 日の毎日新聞朝刊は、薄い効果「諦め」解除と大きな見出しで伝える。

自民党の閣僚経験者は「病床（使用率）が減っても、新規感染者が増えているんだから、いずれまた病床も増えることだ」と懸念を示す。それでも政府が解除に踏み切るのは、「宣言慣れ」による緩みが市中に広がり、宣言を継続してもこれ以上の効果が見込めないためだ。経済への影響が長引く中、前回 2020 年 4～5 月の宣言時のような昼間も含めた幅広い業種への自粛要請には及び腰で、「延長しても打つ手がない」（首相周辺）のが実情だ。

新型コロナ変異株の感染拡大も懸念される中で、緊急事態宣言の効果が薄いと諦めて、拙速に解除していいのか。「打つ手がない」という理由だけでなく、25 日から予定される東京五輪の聖火リレーを意識して、宣言を解除するのでないか。五輪開催地・東京が緊急事態宣言中なのに、五輪行事などできないという声を意識したのだろうか。世界的大流行（パンデミック）が続くコロナ禍のもとで、本当に五輪は開催できるのか。五輪精神からしても、今夏に開催していいのか、シビアに考えなくてはならない。

大阪日日 3 月 19 日

朝日新聞 17 日朝刊、駒野剛・編集委員の「終える至難に立ち向かうとき」と題した多事奏論に注目した。先頃亡くなった半藤一利さんの代表作「日本のいちばん長い日」から始まり、「コロナ禍と五輪」に論が続いていく。

物事を終える。とりわけ国民の生き死に直結した終戦のはまことに困難だったろう。いま、菅義偉首相の最大の使命はコロナ禍を終わらせることである。ワクチン接種を遅滞なく実施し、大規模な検査で感染者を見つけてパンデミックを封じ込め、経済が回らなくて苦境に立つ企業や家庭に救済の手をさしのべる。それだけで、内閣がいくらあっても足りない大仕事だ。

菅首相は東京五輪をコロナ禍を克服した証しとして実現する、と予定通りの開催にこだわり続けている。終息を楽観し過ぎていないか。

そんな有り様を「あぶはち取らず」という。感染力が強い変異ウイルスが広がる一方、海外から多くの選手団が日本を訪れ、国内の移動が活発になればウイルスは勢いを増すだろう。選手には気の毒だが、現下の情勢では、少なくとも今夏は五輪はできないと諦める時だ、と私は考える。

多くの国民が求めるのは「日本の政治が機能している証しとしてのコロナ禍根絶」のはずだ。

首相は終える至難に立ち向かうべきだ。

（2021 年 3 月 19 日）